三枝浩子個展

WABI SABI IN ACTION

キュレーター　佐藤恭子

オープニング・レセプション: 2024年6月6日(木）18-20時

ゲストDJ Kibachanとライブ・ペインティング

2024年6月5日ー29日

Gallery 60 NYC | 208 E 60th St, New York, NY 10022 | (347) 601-4323

10am-5pm、無休、入場無料

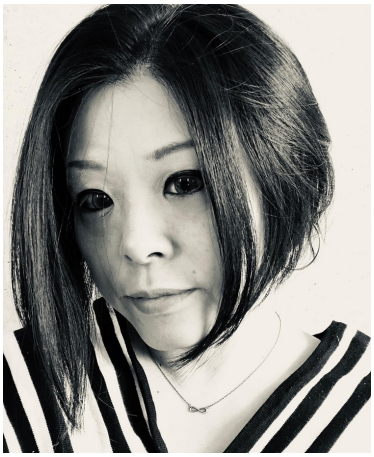
作品購入者には、三枝浩子（プロ占い師の飛鳥）による占いセッション（１回）を無料で受けられます。また、占いのみも予約で受付しております。（6月7日、$80、対面30分）k@kyokosato.me まで。

私たちがお茶会に参加した時、瞬く間に緊張感がありながらも戦国時代の現代よりもゆったりとした時の流れの中へと導入され、静けさとその後に安らぎを感じることができます。三枝浩子は、生まれながらに裏千家茶道と共に育ったので、茶室が心にもたらす効果を日常的に体験してきました。そのため彼女が描く作品は、一見、激動のエネルギーを放っていますが、同時に余白を残すことで裏腹の静けさ＝侘び寂びを感じさせ、私たちに安らぎとヒーリングをもたらします。

またお茶会では、私たちは視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚という五感の全てを使ってこの侘び寂びを体験します。床の間の軸、茶碗や道具を愛で、鳥が鳴く声や木々が風に揺れる音を聞き、お茶と畳の匂いを嗅ぎ、甘いお菓子を味わいます。三枝は、このセオリーも絵を描くときに採用しています。色を選んで形を認識し、素手や筆がキャンバスをなぞる音や色を混ぜる音を聞き、あるいは静寂を意識し、筆、絵の具、キャンバスの質感を触れることで感じ、絵の具とキャンバスの匂いを嗅ぎ、味覚を使うために食べることができる絵の具を試してその味わいを作品に組み込むのです。

手法として彼女は、アメリカのモダンアートで始まったアクション・ペインティングとスパース・ペインティングの双方のテクニックを組み合わせて描きます。アクション・ペインティングでは、（ジャクソン・ポロックのように）キャンバスの前に立って、体を大きく動かしながら描いていきます。スパース・ペインティングの要素としては、（マーク・ロスコやアニエス・マーティンのように）ミニマルな空間の美学を意識して画面を作るのです。こうして劇的なアクションと静かなスパースという相反する「動」と「静」が一つの画面の中で見事に合わされて絶妙な作品として成り立っています。

そして、三枝が強調しているのは、侘び寂びへと通じるスパースの要素です。なぜなら、彼女は自分の作品を通して、観る人々を癒すという究極の目的を持っているからです。日本の美意識と知恵を現代アートの技術を使って絵画として表現し、その絵に触れたより多くの人を癒し、心の平和と光ある未来へと導きたい、それがあまりにも優美な心を持つ三枝の目指すアートなのです。



三枝浩子

1978年山梨県甲府市生まれ、東京を拠点に活動するアーティストで占術師。

個展は、ARTIFFACT Gallery（ニューヨーク、2019年）、G&J Gallery（Comtemporary ART Korea & JAPAN　現代美術日韓展、ソウル、2019年)、Bar Foxy in Shibuya （東京、2016年）で開催している。

参加した主なグループ展は、アート・インキュベーション・シリーズ３ Stepping Into A World （安達元一と佐藤恭子、Gallery Max、ニューヨーク、2023年）、ネオ・ジャポニズム in ウィーン（シェーンブルン宮殿、ウィーン、2019年）、第44回ジャパンウィーク 2019（国際親善協会、アテネ、2019年）、創造者たち – 平成からその先にある時代の芸術家 – （QUALIART、金沢21世紀美術館、2019年）、SPECTRUM（アゴラ・ギャラリー、マイアミ、2018年）、第12回光州ビエンナーレ、想像の境界（韓国光州、2018年）、SURFACES（SPACES – Palazzo Ca' Zanardi – 、ヴェネチア、2018年）、第24回現代美術日韓展（日韓現代美術協会、東京、2018年）、現展（国立新美術館、東京、2016年、2017年、2018年）、日中韓芸術展（日中韓芸術展実行委員会、茨城県つくば美術館、2017年、2018年）、ARTRATES JAPAN (Hive Gallery、ロサンゼルス、2015年）、PARK OF THE FUTURE （オランダアムステルダム国際美術館、1999年）、高美連展（山梨県立美術館、1999年）。

デザイン活動に、ロンドン滞在中2007年に音楽家でヨガのカリスマ、マヤ・ファインズのコミッションでPLANET MAYAのステージ衣装とフライヤーを担当、2017年にはファッション・ブランドのHIROCO Japanを創立。

3歳から絵を描き始め、同時に父親から裏千家茶道の手解きを受けて育つ。2000年、東洋美術学校視覚伝達デザイン科を首席で卒業、2003年、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ美術学校グラフィックデザイン科入学。2020年、BSフジのテレビ番組「ブレイク前夜」に出演。

オープニング・パフォーマンス　ゲスト：DJ Kibachan

伊勢生まれニューヨーク育ちのインターディシプリナリー・アーティスト。本名は木場広実。近年ではレコードをプレイする「DJキバちゃん」として活動の場を広げている。ルーツである日本と多種多様な人と音が共存するニューヨークのダンスフロアからインスピレーションを受ける。そんなキバちゃんのDJセットは、『愛』『ウェルネス』『社会的正義』をテーマに、多岐に渡るジャンル紹介でボーダーレスを目指す。魅力あふれるひとつのストーリーを巧みに織りなす選曲で、芸術、文化、音楽の領域であらゆる聴衆から支持されている。2021年からDJキバちゃん は、Nightmoves、Ace Hotel New York、The Lot Radio、Jupiter Disco、Good Bar、NowHere Cafe, C5BK Gallery、The Elizabeth Foundation for the Arts、St. Nicholas Miracle Garden などで公演。2019年から詩を書きはじめ、ビジュアルまたはサウンド・アーティスト達と実験的なポエトリー・パフォーマンスを展開。2020年、mh PROJECT nyc、2021年、NARS Foundation、2022年、ChaShaMaのレジデンシーを経て、故フィル・ニブロックや上西啓子とコラボ・パフォーマンスも経験。1995年、ニューヨーク芸術大学スクール・オブ・ビジュアル・アーツ絵画科卒業。2001年、ニューヨーク市立大学大学院シティー・カレッジ・オブ・ニューヨーク新造形科卒業。

キュレーター：佐藤恭子

ニューヨークを拠点に活動するキュレーターで日本文化紹介の第一人者。朝日新聞社と共同で「メトロポリタン美術館古代エジプト展　女王と女神」（2014年、東京都美術館と神戸市博物館で開催）を実現。2016年に小松美羽のニューヨーク初展示を手掛ける。前衛的な展示で知られるニューヨークのアートスペース、ホワイトボックスにアジア部門を創立。2018年から2021年までそのディレクターを務め、コシノヒロコのニューヨーク初個展「Hiroko Koshino: A Touch of Bauhaus」（2018年）や、草間彌生、オノヨーコ、久保田成子、千住博、村上隆、杉本博、松山智一、大岩オスカールほか55人の日本人を展示した歴史的な「A Colossal Word: Japanese Artists and New York, 1950s-Present」のキュレーターを務めた。2022年「世界を席巻、日本のアニメ」展（日本クラブ主催、NY）や、2023年から日本を代表する放送作家、安達元一のアートインキュベーション・シリーズ（Japan Contemporaries Series) でキュレーターを務め、日本在住のアーティストがニューヨークで活動できるプログラムを通じて既に約70名を紹介している。また、米アートマガジンJapan Contemporaries の編集長を務める。

Gallery 60 NYC

Gallery 60 NYCは、幅広いジャンルの現代アーティストの多様な作品を展示するために細心の注意を払って新たに設計されたギャラリー。ニューヨークの中心にあり、いま最も注目のアーティストたちの最先端の表現に触れたいアート愛好家にとって究極の場所。新しい才能を育成することに熱意を捧げ、芸術的な探求、文化的な対話、およびアート業界の新たなあり方を育成するプラットフォームとなることを目的とする。Gallery 60 NYCは、エネルギーに溢れた興味深い世界に触れることのできる現代アートの聖域で、新たな才能の発信地である。